https://collective-music.com/

PRESS COLLECTIVE

— Winter 2025 —

collective vol.50
11th January 2025
@event space 雲州堂

edit: 楠田行展 , tawaki　text: 楠田行展　design: yukiokimura.com

Interview

Rothchord インタビュー

記念すべき50回目のcollectiveでは、滋賀県大津市在住のRothchord（ロスコード）さん[fig.01]をスペシャルゲストにお迎えしました。ダブ・テクノ／ミニマル・ダブのトラックメーカーによるライブパフォーマンスをお楽しみください。

ゲストの出演を踏まえて2024年11月2日、同市のブランチ大津京にあるバーガーキングでインタビューを行い、音楽遍歴や楽曲制作などについてお尋ねしました。Rothchordさんの人となりを感じていただければ幸いです。

fig.01: ポートレイト

——先ずは自己紹介からお願いします。

1976年8月30日生まれの48歳です。出身地は京都市で、10年くらい前から大津に住んでいて家族3人と猫一匹で暮らしています。普段は建築関係の仕事をしています。

——最初に買ったCDを教えてください。

初めて手にしたのは長渕剛のアルバム「Stay Dream」です。彼が主演していたドラマ、親子ゲームの主題歌「Super Star」を聞きたくて購入したのですが、期待していた（シングルの）バージョンと異なる内容だったので「何やこれ。違うやん！」と裏切られた気分になりました（笑）。

当時は普通に歌謡曲を聞いていましたね。子供の頃、世間で流れていたイモ欽トリオの「ハイスクールララバイ」やTMネットワーク、B'zなどの曲が印象に残っているのは、シンセサイザーの音が本能的に好きだったからかも知れません。

——テクノに興味を持ち出したのはいつ頃からですか。

高校生の時分はロックを聞いていました。大学1年生の頃、友人からレイ・ハラカミの「Unrest」[fig.02]を借りたところ、1曲目の「On」という曲で「テクノのスイッチをまさにオン」されたような気がします（笑）。本格的にのめり込んだのはKit Claytonが~Scapeレーベルからリリースしたアルバム「Nek Sanalet」[fig.03]がきっかけです。音色（おんしょく）が凄くて、今まで聞いたことのない音にめちゃくちゃ衝撃を受けました。どうやって作っているのか見当もつかず、ただただ圧倒された記憶があります。

Moritz von OswaldとMark Ernestusのデュオ、Basic Channelの作品については、どの曲も音の良さが秀逸で驚愕しました。特にRhythm & Sound[fig.04]は今まで聞いてきたどのレコードよりも音が良くて、ハイとローの音が突き抜けています。このことは配信の音源では聞き分けにくいのですが、アナログ盤を聞くことで理解できます。「僕には他のレコードよりも1.5m前で音が鳴っているように聞こえる」のですが、この音の良さを超えるレコードに今まで、出会ったことはありません。

——大学時代をもう少し振り返ってください。

僕は京都市内にある美術系の大学に在籍していて版画を専攻していました。学生時代に音楽イベントでフライヤー制作やVJを担当した経験があります。大学3年時に学内で友人と音楽イベントを企画したのですが、大学の先生がテクノやエレクトロニカへの理解があったのでOvalやVladislav Delay、レイ・ハラカミをゲストに呼んだこともあります。学生時代の延長で卒業後の2、3年は当時のメンバーとともに、国内のアーティストをゲストに呼んでイベントを企画していました。僕自身は制作した楽曲をライブで演奏していました。

——大学卒業後について語ってください。

フォトショップやイラストレーターを使った制作経験を生かし、デザインの業界に就職しました。「仕事に就きつつ、時間を見つけて音楽をやろう」という計画だったのが、業務に忙殺されて時間がほとんど取れず、本当に苦労しました。楽曲制作への意思が強かったので、一念発起してデザインの仕事を辞めて今は建築関係の仕事をしています。

Rothchordとして本格的に音楽制作を始めたのは2018年からですね。その頃から現在まで仕事と子育

fig.02: Rei Harakami『Unrest』
(Sublime Records / 1997)

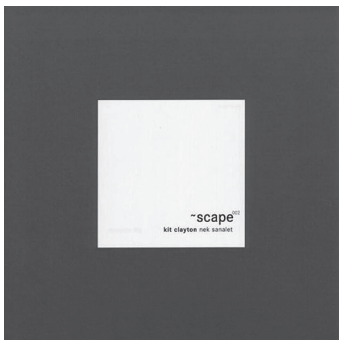

fig.03: Kit Clayton『Nek Sanalet』
(~Scape / 1999)

fig.04: Rhythm & Sound『Aground / Aerial』
(Rhythm & Sound / 2002)

て、音楽制作のバランスは取れています。エイブルトンライブのソフトウェアなどを活用して楽曲を作っています。

——Rothchordの由来を教えてください。

元々、Mark Rothko（マーク・ロスコ）という現代画家が好きで、彼の名前を名義の一部にしました。ダブ・テクノのアーティストにはDeepchordやHeavenchordなど「chord」と名の付く人が多く、捻りだした名義がRothchordです。「便乗しました」（笑）。検索した際、他の人にヒットする名前を避けたいと思って単語を組み合わせて唯一無二のものにしました。名義には、音楽的な部分も含めた僕自身の独自性を込めています。

——楽曲制作における苦労談はありますか。

Basic Channelのような曲を作りたいとは思うのですが、作り方が分からないなか手探り状態で制作していたのは辛かったですね。音楽制作のための生活環境が整ったことを受けて、今までカッコ良いと感じていた曲の洗い出しから始めました。そのうえで、ユーチューブで作り方を模索したところ、ダブ・テクノの作り方について、さわりを解説する動画を見つけました。コードの作り方を学んで、制作のコツを掴んでからは早かったですね。現在の作風に至るのは2018年からです。

——今まで制作した曲数を教えてください。

エイブルトンで制作した曲はボツになったものを含めて120曲ほどです。曲として完成しているのは、レーベルからリリースさせてもらった30曲前後になります。

——リリースについて語ってください。

作った楽曲をサウンドクラウドにアップしたのも、サウンドクラウド上にある音源を物色し始めたのも、今から6年前になります。サウンドクラウドでは、Altone[fig.05]という日本人アーティストと知り合うことができました。彼については、近年ではダブ・テクノの最高峰のトラックメーカーと感じています。曲を聞き「日本にこんなに凄い人がいるのか」と大感動しました。2020年、Altoneさんが運営するZero Signal Recordsから「Vein Of Ore」EP [fig.06] をリリースした際には、デモ曲を沢山聞いてもらってアドバイスをいただきました。松井さん（KMA a.k.a. Kengomatsui）にも褒めてもらった「Cave」という曲は自信作ですね。

Altoneさんが凄いのは、外部のプラグインをほとんど使用せず、エイブルトンに元々備わる純正のシンセ音やエフェクトで曲作りをしている点です。機材に頼らない制作スタイルを知った時は「目からウロコが落ちました」。制作面でいろいろと影響を受けたので、今の僕があるのは彼のおかげです。

fig.05: Altone『Invincible Nature EP』(Echocord / 2024)

fig.06: Rothchord『Vein Of Ore』(Zero Signal Records / 2020)

fig.07: Rothchord『From Behind The Pass』(Lempuyang / 2024)

2020年以降、Rothchord名義でフランス、オランダ、ドイツ、リトアニアのレーベルからも電子出版でリリースしています。昨年にはUKのレーベル、LempuyangからFrom Behind The Pass」EP [fig.07] を発表しました。自信のある作品ですので是非、聞いてみてください。

——曲作りへの姿勢を聞かせてください。

2018年の頃は5分でも時間があればエイブルトンに向かってコードや音色をいじっていましたね。今でもトータルで1日、10時間向かい合っている日があります。おぼろげに思うイメージに近づけていく作業なのですが、「この曲はいけるぞ」という瞬間があります。そのうえで、今の自分のレベルを超える時がやってきて「これは良くできた」と思えた時に曲の完成を迎えます。

——前回のcollectiveに来場いただいたきっかけを教えてください。

以前からSNSを通じて相互フォローの関係だった松井さんがきっかけですね。松井さんが「Pour-Over Beats」[fig.08] のLPを出したときはレコードを即買いしました（笑）。音色が良くてどれも捨て曲がなく、めちゃくちゃ気に入っています。

collectiveには2020年のリリースパーティーに伺うつもりだったのですが、その日は自宅の用事で行けませんでした。コロナ明けの2024年のイベントで、松井さんと会話した際「忙しくて制作ができていない」と聞いたので、才能があるのに勿体ないと感じました。仕事、家庭、制作活動のバランスを取ることが、肉体的・精神的にも辛いことを僕自身体験してきたので、応援しています。

松井さんに会う前は、パリピな人（笑）と思っていましたが、実際会うと全然、違いました。（落ち着いていて）気が合いそうな印象を受けましたね。イベントとしてのcollectiveの印象は、音楽好きでマニアックな人が多いイメージでしたが、行ってみたらやっぱり、そういう人が多かったです（笑）。

——ライブへの意気込み、ご自身のPRや今後の抱負をお願いします。

かれこれ18年ほど音楽イベントに関ってこなかったので、ゲストとしてオファーをもらった時はびっくりしました。声を掛けてもらったことに嬉しく感じています。50回目のcollectiveということもあり、気合いを入れてライブに臨みたいと思っています。

僕は2018年から本格的に音楽制作を始めましたが、その頃はレーベルからリリースできると思っていませんでした。楽曲作りに抱いている思いは「1ミリでもBasic Channelに近づきたい」ということです。好きなダブ・テクノを聞けば、確かに感動はありますが、彼らに近づけません。自分で制作することで、Basic Channelに少しでも近づけると考えています。

これまでは電子出版のみのリリースでしたが、アナログ盤をリリースできるトラックメーカーになることを目指しています。実力をさらに上げていくことが一番の目標ですね。

（インタビュアー：楠田行展）

fig.08: KMA a.k.a. Kengomatsui『Pour-Over Beats』(Collective / 2020)